

依存関係の見直し

児玉 徳美

1. 依存関係考察の歴史

Saussure (1916) が共時態研究の重要性を説き、言語における体系を指摘して以降、ヨーロッパでは新しい言語研究が誕生した。音素の規定など音韻論を中心として1920年代に結成されたプラーク学派や言語構造内の要素間の関係を中心に1930年代に結成されたコペンハーゲン学派などである。コペンハーゲン学派はその言語理論を他と区別するため言理学 (Glossematics) と名づけた。言理学ではある要素が存在するためには、それだけでは意義がなく、それが他の要素に対して相対的な価値を体系の中に占めることによってのみ、その存在が認められるという (価値については児玉 (準備中) 参照)。この要素間に存在する相互関係が機能 (function) と呼ばれる。言理学の根本原理は要素間の機能である $a \text{ presupposes } b$ という依存関係 (dependence) を明らかにすることにあつた。言理学を先導した Hjelmslev (1943) によると、依存関係は次の3種に区別された。

- (1) a. 相互依存 (interdependence) : AとBが互いに相手を予測する。
 例えば実質 (substance) と形相 (form) の関係、ラテン語名詞の格と数の関係など。
- b. 一方依存 (determination) : AはBを、あるいはBはAを予測するが、その逆は成立しない。
 例えばラテン語の前置詞 sine は目的語に奪格を予測する。
- c. 相互無依存 (constellation) : AとBが互いに相手を予測しないで併存する。
 例えば星座 (constellation) の星がそれぞれ独立して存在するように、英語の spit は sp の音連鎖をなしているが、caps, sit, pit も可能であり、s と p は互いに相手を予測するものではない。

言理学は要素間に存在する機能を依存関係と呼んだが、これは併存する要素が互いに他の存在を前提にしているか否かについて存在の前提予測関係を示したものである。そのことは(1a-c)の3種に日本語で「依存」という用語が用いられているが、(1b,c)の()内が英語でそれぞれ *determination*, *constellation* となっていることからもうかがえる。原語のデンマーク語からの日本語訳は林 (1959:18), 英語訳は Whitfield(1961:24)による。

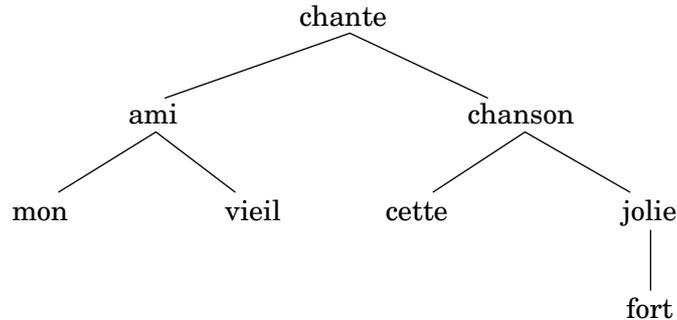
その後ヨーロッパでは Tesnière (1959) が文の統語構造全体にわたって語と語の結合において主従の依存関係をはじめて導入した。そこでは動詞を文の中心とすることにより、文のすべての要素が階層をなす主従の依存関係によって分析されるようになった。要素間に存在する機能を依存関係とみなす点では Tesnière も Hjelmslev と同じであるが、Tesnière の依存関係は Hjelmslev の言うように併存する要素が存在する際の前提予測関係ではなく、複数の要素が結合する際に形成する範疇においてどちらが主役を演じるか否かについて範疇の主従関係を示している。例えば動詞は名詞を支配し、名詞は形容詞や冠詞を支配する、あるいは逆に名詞は動詞に依存[従属]し、形容詞や冠詞は

名詞に依存するようになった (Tesnière 1959は半世紀後に小泉2007aによって日本語に全訳され、日本でもやっと親しみやすくなった)。Tesnière (1959:15) の依存文法によると、(2)の文は(3)のような図系 (stemma) によって表される。

(2) Mon vieil ami chante cette fort jolie chanson.

(私の古い友人があのととてもすてきな歌を歌う)

(3)



(3)において下方の要素が上方の要素に直接依存しており、文の諸要素は動詞を頂点とする依存関係によって結合している。

統語構造全体に主従の依存関係を設定すべきとした Tesnière (1959) の主張はその後少数派ながら Anderson (1971, 1977), Melčuk (1979), Hudson (1984) などに受け継がれ、主従の依存関係をいっそう徹底していった (詳しくは児玉1987a参照)。

Saussure (1959) 後、アメリカの言語学もヨーロッパと同じく共時態研究を重視し、広義の構造主義に属するが、独自の発展もとげた。一方で文化人類学と結合してアメリカ大陸での未知の言語を対象にし、他方では行動主義 (behaviorism) の波に乗って直接観察できる言語形式を対象に分析していった。そこでは語と語の間に働く依存関係ではなく、語が結合して形成する句・節・文の構成素を基本単位とする IC 分析が確立した。大小の構成素間の関係を重視する構成文法 (constituency grammar) は古代ギリシャ語文法から存在するものであり、Chomsky (1957) 後の初期の生成文法にもそのまま引き継がれていった。

1960年代までの生成文法は構成素関係に基づく句構造文法の不十分さを補うために、句構造よりも変形規則や統語論と意味論との関係に関心が集まった。しかし1970年代には変形規則の制約や語彙部門の構造への関心が強まるにつれて、句構造が再び注目されるようになった。その契機は Chomsky (1970) の Xバー理論にあった。Chomsky (1970) は Xバー規約により N, A, V を主要素とする NP, AP, VP の内部構造を一般的に次のように説明している。

(4) a $X'' \rightarrow [\text{Spec}, X'] X''$

b. $X'' \rightarrow X \dots$ (where X can be N, A or V)

(4b)から説明すると、Xは語彙範疇 N, V, A を領域とする変項であり、X'はXを直接支配する節点を意味し、Xの後の...はXの補部 (complement) である。(4a)のX''は最高位レベルの構造であり、X''に前置するX'の指定辞 (specifier) とX'を直接支配する。当時のChomskyは変形的仮説に反対し語彙論的仮説を提唱する立場にあり、句と文には変形規則が適用されない類似の内部構造もあると主張した。彼の提案は(4)とともに文について次の書き換え規則を含んでいた。

(5) $S \rightarrow N'' V''$

(4)と(5)の間、あるいは(4)において例えば[Spec, N'] (限定詞) と [Spec, V] (助動詞) の間に有意義な類似性があるとは思われない。そのような問題点はともかく、Chomsky (1970) は、付随的利点と

して、生成文法において句の主要素・従要素（あるいは主要語・修飾語）の関係を規定しなければならないという長年の課題を解決する鍵を提供した（詳しくは児玉1987a:169-171参照）。

その後、生成文法のXバー理論はJackendoff (1977) などにより整備されたが、今なお意見の一致を見ない多くの課題が残っている。例えばバーの最大数は何個であるのか、範疇によってバーの数は異なるのか均一であるのか、範疇は素性との関連でどのように下位区分されるのか、Xバー理論はどのような制約を受けるのか、などである。依存文法との最大の違いは主語の扱いである。Xバー理論は(3)と違って主語に格別の優位を与え、目的語のように動詞の従要素とみなしていない。Xバー理論は依存文法の一部を導入しているが、主要素と従要素である指定辞・補部との関係がどのようなものであるかについて十分な規定がなされていない。その結果、Xバー理論の道具立ては文の分析についてはともかく、文の連なる談話構造については全く無力である。このような問題が生じるのはXバー理論が依存関係と文法機能・語順という3つの作業を1つの規則で同時に進めているためである。この問題については後ほど§3で考察する。

言語分析は、児玉(1980)で述べたように、1970年代後期より語彙部門を拡大したが、その流れは今日まで続いている。今日では語彙意味論 (lexical semantics) や語彙文法 (word grammar) という言語理論まで生まれ、生成文法で用いられる多くの用語や規則も語彙項目・素性・形態素を表す節点に適用されるものである。今や言語分析は語彙部門が中心的であり、文法は語を詰め込むためのものではなく、むしろ語に奉仕する機構になっている。

語彙情報が重視される今、語と語の関係を問う依存文法はTesnière (1959)の頃に比べて受け入れるのに格段に有利な状況にある。しかし依存関係という概念は従来のものでよいのかというのが私の疑問である。依存関係が言語表現を生成理解する中核になるためには、その適用範囲を談話にまでどう拡大するか、主従の一方依存だけを認める従来のやり方でよいのか、同じ主要素に依存する姉妹間にどのような依存関係が想定されるのかなどの問題について見直す必要がある。構成文法が隆盛であったとき、児玉(1980, 1982)は依存文法の必要性を主張し、依存文法の必要性が認識されている今、その見直しを訴えている。私は少々「へそまがり」なのかもしれない。しかし語と語の関係を問うことから出発し、語と文、文と文の関係を問う従来の依存文法に異論はない。問題は依存関係の中身である。

2. 主要素と従要素の規定

依存関係とは、一般に、結合している語と語の間にみられる非対称的な関係と考えられる。主要素と従要素の間には次のような非対称的な特質がみられる（詳しくは児玉1987a,b参照）。

- (6) a. 要素のAとBが結合した場合、範疇において要素群ABの特徴的役割をはたす要素が主要素、他方が従要素である。例えばGood students write interesting essays.という文において主語の主要素はstudentsであり、goodがその従要素である。
- b. 語順において従要素の位置は主要素の位置に応じて決定され、その逆ではない。例えば、上例でgoodの位置はstudentsの位置によって決定され、goodの位置によりstudentsの位置が決定されるのではない。
- c. 主要素は共起する従要素の数と種類を決定する。例えば、上例のgoodはstudentsが存在

してはじめてそれと共起でき、essaysという目的語の存在は主要素writeの語彙構造により決定される。

- d. 従要素の意味は主要素の意味構造に含まれるものであり、その逆ではない。例えば、writeの意味構造には、主語・目的語としてAgent・Goalの意味構造が含まれる。
- e. 主要素が従要素の屈折形態を決定する。例えば、述語動詞が目的語に対格や与格などを要求する。
- f. 主要素を残して従要素を省略することができるが、その逆は不可能である。例えば、(Good) Students write (interesting) essays.において()内の従要素は省略できる。

依存関係を規定する条件としては(6a)が最も基本的なものであり、(6b-f)はそれより派生した結果であるともいえる。しかし上記の特質が依存関係を規定する必要十分条件となるわけではない。依存文法とはいえ、いっさいの構成素関係を排除するものではない。特にmy mother and father (=my parents)のような等位構文はどの要素も(6a)の主要素の条件を満たさないため、句としての構成素関係が認められる。等位構文は依存文法だけでなくXバー理論の例外ともなる(児玉1987a:175参照)。(6b-f)にもいくつかの例外がある。例えば、ラテン語のような屈折言語では自由な語順をもち、従要素の位置は必ずしも主要素の位置によって決定されない。また次例の(7)では従要素によって主要素の前置詞が異なり、(8)では数の呼応が必ずしも主従の依存関係の方向と合致しない(主要素から従要素への依存線は関連する部分のみに示す)。

(7)

a. in August



b. on August 1st

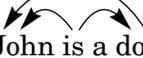


c. at the beginning of August



(8)

a. John is a doctor.



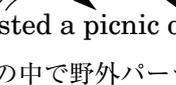
b. They are doctors.



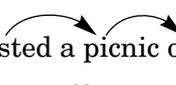
上例のような例外があるにせよ、依存関係は統語法・意味・形態において文中のすべての特質を合図し、文を形成するあらゆる上方の結節点である。主従の依存関係の存在しないところには意味関係も存在しない。複数の依存関係がある場合、常に多義性が生じる。しかし複数の意味関係があっても、複数の依存関係が常に存在するわけではない。同じ依存関係にある語句が有する意味に違いがあるためである。

(9)

a. He suggested a picnic on a bus.
(彼はバスの中で野外パーティを提案した)



b. He suggested a picnic on a bus.
(彼はバスでの野外パーティを提案した)



(10)

a. John almost swam.

(ジョンはもう少しで泳ぐところだった)

b. John almost painted a picture.

(ジョンはもう少しで絵をかきだしそうになった/ジョンはもう少しで絵を仕上げるところだった)

(9a,b)の意味の違いは依存関係の違いによる。(10a,b)のalmostは主動詞の従要素として同じ依存関係にあるが、(10a)が一義であるのに対して(10b)は多義である。これは(10a)のswimが行為動詞(activity verb)として終結点のない行為のみを表すため一義であるのに対して、(10b)はpaint a pictureが達成動詞(accomplishment verb)として行為と終結点の両方を含意しalmostがその含意のいずれと結合するかにより二義になる。

(9)(10)の依存線は統語的にも意味的にも同じものであるが、Tesnière (1959:43)は統語論と意味論において主従の依存関係が逆方向に働き、意味的依存関係は矢印の先が上図と反対の要素につくとみなしている。意味の投射は統語上の従要素が主要素を限定し、従要素があってはじめて主要素の意味が完全なものになるという。また文の意味にとっては統語上の従要素がより本質的なものであり、統語上の主要素の役割は従要素の意味を支えているにすぎないともいっている。Tesnière (1959)はそのタイトルからうかがえるように、意味上の依存関係を詳しく展開していないが、意味上、主従の依存関係は情報の多寡ではないはずである。Tesnière (1959)の規定は依存関係の概念そのものをあいまいにする。本稿はその後の依存文法に従い、(9)(10)が統語的にも意味的にも同じ依存関係をなすとみなす。統語論と意味論は必ずしも常に同じ依存線をもつわけではない。(9)(10)とは別の意味的(統語的)依存線については後ほど(23)-(27)で考察する。

これまで文内の語と語の依存関係をみてきたが、依存関係は複合語や派生語の語形成や文や文を超えて文と文の連鎖にも適用される。

まず複合語からみてみよう。語形成において意味をもつ複数の形態素を主要素(H)と従要素(M)に分けると、複合語の内部構造は論理上次の4通りの配列をもつことになる。

(11) a. MH型 b. HM型 c. MM型 d. HH型

英語と日本語で複合名詞を各2例ずつあげる。

(12) a. blackboard, fieldwork / 黒板、実地調査

b. tiptoe, way out / ?

c. hangover, redcap / 赤帽、避妊

d. fighter-bomber, singer-songwriter / 戦闘爆撃機、シンガー・ソングソングライター

日英語を含む多くの言語で(12a)に類する複合語が最も多く、Williams (1981)のいう「右側主要素原則」に基づく(11a)に従っている。英語では(11b)による複合語は(12b)などごく少数である。形式上looker(s)-on (<look on), passer(s)-by (<pass by)などもこの型に属するが、これらは語形成上動詞句に接辞がついたものであり、本来のHM型ではない。HM型は日本語では皆無に等しい。中国語の「動詞+名詞」に由来する「防水、読書、出国」などは語形成上HM型であるが、現代日本語では「防、読、出」が名詞を表すわけではなく、むしろ(11c)のMM型に近い。(11c)は外心構造(exocentric construction)と呼ばれるもので(6a)の条件を満たさない。その結果、複合語全体の範疇を表す構成素が複合語の中に欠けている。(12c)のhangoverは動詞句hang over(二日酔いである)

に由来するが、統語上 *hang* も *over* も名詞を合図していない。*redcap* は語形成上 HM 型に属し、「(車で) 赤帽をかぶった人」を表すが、意味上 *red* も *cap* も「人」を合図しているわけではない。「避妊」については(22d)を参照されたい。(11d)に従った(12d)の類は同義や対の意味を表す同一品詞の語を結合したものである。

派生語内の依存関係をみてみよう。一般に接頭辞は語基 (base) の意味を変えるが品詞を変えるわけではなく、逆に接尾辞は語基の品詞を変えていく。その点、(6a)の基準からみて、接尾辞は統語的にも意味的にも派生語の範疇を変えており、派生語内の主要素といえる。同じように、日本語の助詞 (後置詞) も名詞を従要素とする主要素となる。要素群「名詞+助詞」の特徴的範疇は助詞によって示されるためである。これは英語での前置詞が前置詞句の主要素になることに対応している。

次に談話における文と文の関係をみてみよう。

- (13) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。
——川端康成『雪国』

(13)は『雪国』の冒頭の一節である。2番目の文を単独で取り出した場合、意味不明の文となる。しかしこの文脈の中では2番目の文の「白く」と最初の文の「雪」が関連語句として語彙結束 (lexical cohesion) を示し、さらに3番目の文が続くことにより、汽車でトンネルを抜けると暗い夜空のもと地面が白くおおわれていたと推論される。要するに、文が連なる談話においては通例 (直前とは限らないが) 前の文を前提にして後続の文の解釈が決定され、前の文が主要素、後続の文が従要素の働きをしている。

文内の形態素と形態素、語と語、談話内の文と文について他の形態素・語・文と何のつながりもない要素は不適格なものとして排除される。この主従の依存関係は直接言語表現されたものを対象としており、各人にほぼ一様に解釈される。文内の主従の依存関係にある要素の語順は後ほど(31)でみるように言語によって異なるが、文を超える談話内の文と文はどの言語でも一様に主要素前置で解釈される。

談話分析においてはもう1つ大きな課題がある。言語分析が談話全体をも対象にするとすれば、依存関係は言語表現された談話全体または談話の一部である特定の文とその談話を支えている非言語的情報としての意図・現実世界についての背景知識・信念体系などとの関係である。非言語的情報は直接言語表現されていないため話し手・聞き手として言語表現されているものを非言語的情報に結びつけるためにある種の推論を働かす。推論過程は意図・背景知識・信念体系などにより必ずしも各人に一様なものではない。だからといって、各人に共通しないことを理由に言語分析から排除することは「科学」として最も興味ある領域を放棄することになる。(14)を参照されたい。

- (14) a. 15-50歳の女性の数は決まっている。生む機械、装置の数は決まっているから、あとは一人頭でがんばってもらうしかない。
——柳沢厚労相 (2007年1月)
b. 高熱水費は現行の法律では領収書の提出が不要であり、その限りでは松岡大臣は法律にのっとって処理している。
——安倍晋三首相 (2007年3月)

(14a)に対しては女性差別として野党はもちろん与党からも批判が出た。柳沢厚労相は2007年の正月に座右の銘として「人間尊重」と書いていた。厚労相の本音ともいえる(14a)は建て前の座右の銘といかにもそぐわないものであった。安倍首相もその発言について国会で異例のお詫びをしたが、野党からの厚労相の辞任要求には応じなかった。(14b)での松岡農林相は事務所費用として本来無料で

あるはずの議員会館内の光熱水費に年間500万円あまりを計上したため、予算委員会でその内訳を説明するよう野党から追及されたが、「適切に報告した」と繰り返すだけで、何の説明もしなかった。「適切に」は小泉純一郎元首相が記者からの質問に答えて「適切に判断します」を頻用して以来（児玉 2006:135 参照）、「善処します」「前向きに検討します」と同じく何の意味もない政治家の「ごまかし」用語となった。松岡農林相は自分の発行する新聞で座右の銘が「真実一路」であるという。これまた言行不一致の典型である。政治家は座右の銘がお好きなようであるが、座右の銘は「真実」を隠すメッキの役割しかはたしていない。(14b)は農林相の報告に「納得できるか」と野党から質問されて首相が行なった答弁である。誰の目にも虚偽報告は明らかであり、安倍首相も本音は納得できないながらも、建て前として松岡大臣をかばった。確かに現行の法律は領収書の提出を義務づけていない。しかし領収書や会計帳簿を3年間保存する義務は課している。もし松岡農林相の主張が認められるならば、政治活動費として公にしたくない経費はすべて法律上明細書提出不要の光熱水費に計上することが可能になってしまう。

安倍内閣は「美しい国、日本」をスローガンとして2006年9月に発足したが、発足早々に行革担当相や政府税調会長が不祥事で辞任し、その後を追って(14a,b)のような事態が生じた。安倍首相としては柳沢厚労相や松岡農林相の辞任はあくまで避けたいところであった。もし辞任に追い込まれたら、大臣の任命権者としての責任を問われるためである。その結果、度重なる失言や失態を弁護し糊塗するために、多くの言辞を労することでことばがますます軽くなり、「美しい国」の中身もあやしくなっていく。日本は古くから建て前と本音との開きが大きいといわれている。ことばが軽い状況では建て前として論じられる公式の発言と本音ともいえる失言の落差がますます大きくなる。しかし他方で人は一般に無秩序や無意味を嫌い、多様な出来事や事態の間に筋道の通った理由づけや何らかの因果関係を見出そうとする（児玉 2006a:53 参照）。その結果、建て前と本音の開きが大きい場合、その開きをできるだけ縮小しようとする引力が両者の間に働き、いつの間にか「建て前」が本音に引きずられてうわべだけの疑わしい存在になってくる。さらには発言や談話は個人の主張や価値観を表明するものであるだけに、建て前と本音、あるいは発言と価値観は主従の依存関係というより、相互依存関係にある。こうした言語状況の中で(14a,b)のような失言や失態は建て前や理念を託したスローガンをも押し下げていく。

松岡大臣を批判していた野党の民主党内にもその後農水相と同じごまかしがあることが判明した。中井洽（ひろし）衆議員が議員会館内での2005年の光熱水費286万円は政治活動費の一部を付け替えたものである誤りを認め、会計報告を訂正した。相変わらずごまかしや不正をとりつくろふ帳尻合わせが与野党の議員の間で横行している。政治は人の言動のうち主張や価値観が最も端的に現れる領域である。それだけに政治での不正やあいまいさは一方では政治不信を招くとともにそのような実態を許容する民度を反映し、他方では社会の規範や価値観などに影響を与えることにもなる。

(14)での主従の依存関係は(7)-(13)の文言にみられるほど緊密なものではない。しかし(7)-(13)と無縁のものではなく、むしろその延長線上のものである。(7)-(13)の解釈が主に言語表現に基づくのに対して、(14)は言語表現だけでなく語られないものも対象とし、言語表現に隠されている背景知識や信念体系などの不可視的な実態と密接に結びついている。これまでの言語学が不可視的なものを決して扱わなかったわけではない。具体的な表現を対象としながらも、抽象的な言語普遍性や認知原則を追究してきた。同じ不可視的なもののうち、従来の言語学が扱った言語普遍性や認知

原則が主として生得的能力に由来するのに対して、(14)での背景知識や信念体系は生後の社会経験に由来するにすぎない。人文社会現象がことばを介して記述・説明・分析されるとすれば、依存関係を軸とする多様な不可視的因子を解きほぐすことによってはじめて人間の関与する事象の全体像に迫ることができよう。

3. 依存関係と語順

標記の関連について大きく2つの問題がある。1つは依存関係が語順にどのように反映しているかであり、あと1つは言語理論が言語実態をふまえ、語順との関連でどのような依存関係を規定すべきかという問題である。まず第1の問題からみてみよう。

要素Aが要素Bに依存する場合、ABの依存関係は統語的にも意味的にもすべての言語において同じものである。次例を参照されたい。

- (15)
- a. The large spider frightened Aunt Matilda.
- b. その 大きな クモが マチルダ おばを ぎょっとさせた。
- c. マチルダ おばを 大きな その クモが ぎょっとさせた。
- (16)
- Magna Matildan perterruit amitam aranea.
- large Matilda frightened aunt spider

上記の主要素から従要素への依存線は統語的・意味的依存関係を示している。(15a,b)の英語と日本語は語順こそ違いますが、同じ主要素に依存する一連の従要素はそれぞれひとまとまりの語群をなしている(英語のThe large spider, 日本語の「その 大きな クモが」など)。(15a)の英語は動詞に依存する名詞句の語順および名詞を主要語とする従要素の語順が固定しているが、日本語は(15b,c)のように語順の変更が可能である。ただし語順を変えても統語的・意味的依存関係は変わらない。(16)のラテン語はAitchison (1978:71)による。ラテン語も(15a)に対応する語順の方が普通であるが、(16)では主要素に依存する従要素がすべて遠く離れ、依存線の交差もみられる。これが可能であるのも屈折が形態上依存関係を明示しているためである。たとえ(16)の語順をとっても、意味・形式上依存関係は英語や日本語と同じものである。

依存関係は本来語順と無関係なものであるが、(15)(16)でみたように、依存関係にある要素群は隣接しがちである。さらに多くの言語では同じ範疇からなる要素群ABはしばしば主要素前置か主要素後置かの同じ依存線をとる。これに対して中国語などの少数言語では同じ範疇からなる要素群が依存関係とは別の意味原理に応じて異なる方向の依存線をとることがある。

- (17)
- a. 賊 跑 了。
- ‘The thief has run away.’

- b. 跑 了 贼。
'A thief has run away.'
- (18)
a. 他 在桌子上 跳。
'He jumped up and down on the table.'
- b. 他 跳 在桌子上。
'He jumped onto the table.'
- (19)
a. 他 两天之内 回来。
'He will come back in a few days.'
- b. 他 在中国 住了 三年。
'He lived in China for three years.'
- (20)
a. 他 把黑板上的字 擦了。
'He erased the letter on the blackboard.'
- b. 他 在黑板上 写 字。
'He wrote a letter on the blackboard.'
- (21)
他 住 在北京。 = 他 在北京 住。
'He lives in Peking.'

(17a,b)(18a,b)は同じ語句からなるが、意味の違いに応じて依存線の方向が逆である。(17)では動詞に依存する名詞(賊)が意味上定(definite)であるか不定(indefinite)であるかによって語順が異なり、(18)では動詞に依存する副詞語句が動作の行なわれる場所であるか、動作による移動場所であるかによって語順が異なる。同じように(19a)は「二・三日すれば→彼は帰ってくる」ことになり、(19b)は「中国に住んで→三年になる」。(20a)は「(すでに書いてある定の)字を→消し」、(20b)は「書いて→(不定の)字」になっている。(17)-(21)では主要素の動詞とそれに依存する名詞・副詞語句との依存関係は変わらないが、両者の語順は意味上の写像一貫性の原則(iconicity principle)に応じて逆方向になっている。写像一貫性の原則とは出来事を認知する時間的順序が語順に反映することをいう。(21)で2通りの語順が可能であるのも、「住」と「在北京」が認知上いずれが前であると決定しがたいためである。

中国語では文内の語順に影響を与える、依存関係と異なる意味上の原則が語形成にも反映している。例えば、2つの動詞が結合して形成される多くの複合動詞(詳しくは王2007参照)は、同じ範疇の動詞を構成素とし統語上はHH型に属するが、意味に応じて構成素順序が異なる。

- (22) a. 様態→行為(MH型)
拔取(抜き取る)、飛来(飛んで来る)

- b. 行為₁→行為₂ (MH型)
敗退 (敗退する)、回去 (帰って行く)
- c. 行為→結果 (MH型)
学習 (学習する)、打開 (打開する)
- d. 動詞→目的語 (HM型)
避妊 (避妊する)、忘記 (記憶を忘れる)
- e. 等位 (HH型)
盜窃 (窃盗する)、収容 (収容する)

上例にみるように、意味によって主要素の位置が異なる。語形成における(11)の配列型からみると、(22)は統語上HH型であるが、意味上はMH型が最も多い。ここでは文内の語順と同じく写像一貫性の原則が働いている。その例外として動詞を目的語とする(22d)はHM型に従っているが、これも文内の語順に対応したものである。(22e)のHH型は一種の等位構造であり、2つの動詞のうちいずれが主要素か決めがたい。最初の例が中国語と日本語で語順が逆になっているのもそのためである。(22)は動詞からなる複合動詞であり、外心構造のMM型は含まれない。中国語の複合動詞の多くは日本語では名詞として定着している。中国語からの借入は複合動詞に限らず、多様な品詞の結合した複合語に及んでいる。今更言うまでもないことながら、日本語の漢字表現は中国語の強い影響を受けている。

次に、語順と関連してどのような依存関係を設定すべきかという第2の問題に移る。これまで依存文法は結合する要素の範疇に基づいて主従の依存関係を規定した。依存関係と語順は直接結びつくものではなく、語順は依存関係が決定したあと、その関係を利用しながら改めて決定された。これに対して、Xバー理論での主要素や指定辞・補部などの概念は無規定に近く、語順と結合して主要素の前か後かで指定辞・補部と呼ばれるにすぎない。こうした概念は依存関係の主要素・従要素とは別物である。例えば(5)において動詞に前置するN"は名詞という範疇、主語という文法機能、さらに語順上動詞に前置するという3つの役割を付与されている。これはXバー理論が構成文法から派生したためである。一般にIC分析にみられるように、構成文法は文を語より大きい句・節の構成素単位に区分し、その際、3つの異なる作業を同時に進めている。つまり、それぞれの構成素は範疇(品詞)を付与され、その範疇を前提に語順と文法機能が指定されている。

Xバー理論を含む構成文法の記述方法は範疇・語順・文法機能の間に一定の対応関係がある言語は扱いやすい。Chomsky (1981:128) はHale (1978) に従って自然言語を階層言語 (configurational language) と非階層言語の2つに大別した。前者には英語・フランス語などが属し、後者には日本語・中国語などが属する。ここでは語順に基づいて統語上文法機能を決定できるVPなどの句構造が存在するか否かが(非)階層性の重要な基準になっている。日本語などはVPなどの統語上の句がなく、文法機能が構造に依存せず、語順も比較的に自由であり、英語のようにXバー理論がうまく適合しないのは当然の帰結である。

では依存文法は言語理論として語順と切り離して依存関係を規定しているが、非階層言語もうまく説明できるのかという疑問がある。例えば日本語は比較的自由的な語順と無関係に依存関係が設定されるが、結果的には主要語後置の語順原則を厳格に守っている。依存関係が語順を含む言語構造の中核をなしている。これは依存関係にある要素が同じ範疇や同じ文法機能をもつ場合、同じ語順をとるためである。しかしその依存関係も万全ではない。(17) - (22)の中国語のように、主従の依存

関係にある要素が同じ範疇や文法機能を有しながらも、異なる語順をとる場合があるためである。中国語のような語順を説明するためには、2つの課題がある。第1は依存関係、文法機能、範疇とともに意味上の原則（例えば写像一貫性の原則）を確立し、各要因の相互関係を明らかにすることである。第2は主従の依存関係が中国語のような意味関係を十全に記述できないとすれば、できるだけ正確に意味構造を反映するよう従来の依存関係を見直すことである。そこでは意味との関係で依存文法が依拠する基本概念である一方依存を見直すことにもなる。第1は永続的な課題として残るが、第2の課題は次節で考察する。

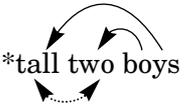
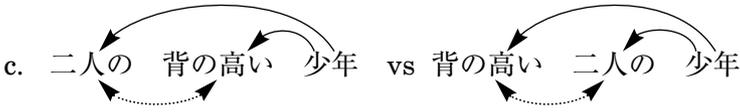
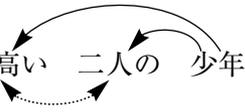
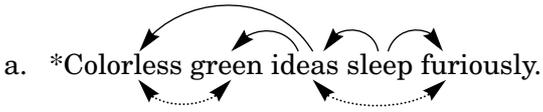
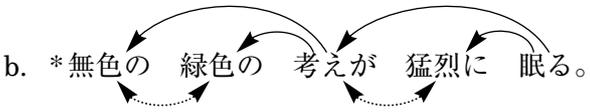
4. 依存関係の見直しへ

前節までの依存関係は主に従来の依存文法で論じられている主張に基づくものである。しかし(17) - (22)でみたように、従来の依存関係は中国語の語順を解くすべての鍵を提供するわけではない。依存関係ができるだけ言語構造の全体へ迫るためには、従来の依存関係を見直す必要がある。まず英語を対象に複数の命題からなる文、特にto不定詞を含む構造からみてみよう。

- (23)
- I believe him to be honest.
-
- (24)
- a. John is easy to please. (ジョンは喜ばせやすい)
-
- b. John is eager to please. (ジョンは人を喜ばすのに熱心だ)
-
- (25)
- a. I asked her what to eat. (私は何を食べていいか彼女に聞いた)
-
- b. I told her what to eat. (私は何を食べていいか彼女に伝えた)
-

上例では例文の上側の依存線が従来の統語的意味的依存関係を示しているが、下側の依存線はto不定詞の述語が意味上有する依存関係を新たに示したものである。英語では(23)の上側にみられるように、通例依存線が交差しないが、下側の依存線を結合させると、上側のbelieveからtoへの依存線と下側のbeからhimへの依存線が交差する。依存線の交差は(24a)や(25b)にもみられるように、文が複数の命題を表す場合にしばしば起こる。(24a)がTo please John is easyの意味であることはisからtoへの依存線によって示唆される。(24a,b)ではともにpleaseからJohnへ依存線が引かれているが、Johnは(24a)ではpleaseの目的語であり、(24b)では主語である。その違いは上側の依存線においてJohnと結合する形容詞easy, eagerの違いによる。(25a,b)ではeatからI, herへ依存線が引かれており、それぞれIやherがeatの主語となる。両者の違いは主動詞ask, tellの特質による。

同じ主要素に依存する従要素は姉妹を構成し、姉妹どうしが互いに他を牽制しながら語順を決定している。次例では姉妹間の依存線を下側に点線で示す。姉妹どうしが互いに牽制しているとすれば、姉妹は一方依存でなく相互依存であり、点線の両端に矢印をつける。

- (26)
- a.  vs 
- c.  vs 
- (27)
- a. 
- b. 

- (28) a. Mary₁ will₂ meet₃ John₄ at₅ school₆ tomorrow₇.
 b. 花子が₁ 明日₇ 学校₆ で₅ 太郎に₄ 会う₃ だろう₂.
 c. 太郎に₄ 学校₆ で₅ 明日₇ 花子が₁ 会う₃ だろう₂.

(26a)の英語は姉妹要素の意味の違いによって語順が固定しているが、(26b)の日本語ではいずれの語順も許される。(27a)が意味上不適格であることは上側の依存線により結ばれたideasとcolorless, greenとの関係だけでなく、colorlessとgreenの姉妹要素間の矛盾によっても説明される。これは(27b)の日本語も同様である。(28a,b)では依存線を引いていないが、英語と日本語の語順が主語を除いて鏡像関係にある。鏡像関係にあること自体、日英語の姉妹どうしが互いに意味や文法機能に応じてその語順を決めている証拠である。(28a,b)は無標の語順であるが、有標語順の場合、英語では随意要素のat school, tomorrowを文頭に移動することもできるが、日本語は随意要素の「学校で」「明日」だけでなく必須要素の「太郎に」「花子が」を含めて(28c)のように語順を変えることもできる。

姉妹要素が互いに意味や文法機能を点検しながらその語順を決めているとすれば、依存関係には意味や文法機能が従来想定されていたよりはるかに深く関与していることになる。§ 3では中国語が英語や日本語に比べて意味が重要な役割をはたす特異な語順を示すと述べたが、依存関係にある要素にそれ相応の意味を仮定した場合、中国語が格別特異な言語であるということにはならない。

(17)の中国語では同じ主語が主要素の動詞に前置したり後置し、(18)(19)では場所や時間を表す副詞語句が動詞に前置したり後置しているが、似た現象は英語でも生じている。例えば他動詞構文で同じ名詞が行為者を表すか対象を表すかで主要素の動詞に前置したり後置し、同じ副詞語句が頻度を表すか様態を表すかでその語順が異なる。

類似の現象はドイツ語にもみられる。

- (29) a. [位置—与格] auf dem Tisch (机の上に)
 b. [方向—対格] auf den Tisch (机の上へ)
- (30) a. Ich bin gestern hier glücklich angekommen.
 b. I arrived safely here yesterday.

(29a,b)では同じ前置詞が意味に応じてその従要素に異なる格を要求している。動詞に依存する副詞語句が姉妹として動詞に後置する場合、ドイツ語は(30a)のように一般に時間・場所・様態の語順をとり、(30b)の英語と鏡像関係にある。

意味に応じて形式が異なるのは語彙項目の dog, cat などに限らない。語と語が結合する構文にも意味と形式の対応がみられる。例えば自[他]動詞構文、二重目的語構文、結果構文、時間[頻度・様態・場所・方向]を表す副詞語句と動詞が結合した構文などである。このような構文を形成する複数の語は統語上主従の依存関係にあるとしても、意味上は共存することによって互いにその存在意義が生まれており、相互依存の関係に近い。

中国語では例えば動詞に依存する従要素は主語・目的語などの文法機能や場所・方向・時間・様態・因果関係などの意味だけでなく、定—不定、写像—貫性の原則など、文や複合語の形成に多様な意味が付与されているにすぎない。従要素に付与される意味を拡大することにより (17) - (21) における中国語の名詞や副詞語句の語順を説明することができる。(22)の複合動詞においても統語上 HH型である2つの動詞は同じ資格の姉妹を構成するわけではなく、意味上2つの命題を構成する。したがって2つの命題間には(22a-e)で示した「様態—行為／行為—結果」などの意味関係や「動詞—目的語」の文法関係が付与されることになる。中国語の特徴は依存関係で結合する文内の語や構文、あるいは語形成での形態素に付与される意味や文法機能が他言語に比べて広範囲に及んでいるという程度の違いであって、質の違いではない。

姉妹間や構文内に意味上の相互依存関係を想定することにより諸言語は従来考えられた以上に類似した構造をもつことになる。例えば英語は主要素前置、日本語は主要素後置と、両言語は依存関係において両極をなすとされるが、(26a,b)には全く同じ依存線も引かれ、(27a,b)も下側の依存線が両言語構造をより接近したものとしている。また(28)(30)のような異なる言語間に鏡像関係が成立するのも構文内に類似の相互依存の関係が働いているためである。

現実の言語活動をみると、相互依存関係は姉妹間や構文内だけでなく、主要素と従要素の間にも働いているのではないかの疑問さえ出てくる。時間軸にそって発せられる語や文が連想に基づいて次の言語表現の概念や命題を喚起しているためである。児玉 (2006b) で述べているように、日記やメモなどでは名詞止めの文が多く、主要素である述語が欠けている。これが可能であるのも従要素の名詞から主要素の述語が推論できるためである。また談話内の一連の文の生成理解に要する時間は文内の依存関係が主要素前置であるか主要素後置であるかに関係なく、諸言語間でほぼ同じである。ここでは文内の語がいちいち一方依存の関係に従って生成理解するというより、つまり(3)のような立体的な構造図を確認するというより、むしろ時間軸にそって線条的に流れる各要素の多様な情報を瞬時的に処理しているように思える。現実の発話の生成理解には小泉 (2007b:177) のいう構造系列から線条系列への切り替えが進行している (詳しくは児玉 (準備中) 参照)。この過程で働く依存関係は各要素を結ぶ役割を有しているが、一方依存か相互依存かはさして重要な問題でないのかもしれない。

文構造を対象にした従来の言語類型は諸言語の構造がいかにも多様に分かれているかの錯覚を抱かせるが、その違いは文を超える談話構造にまで及ぶわけではない。意味上の談話構造においては多くの同質性さえみられる。

(31)	英語	中国語	日本語
a. 主要素前置言語 (文内)	+	±	-
b. 衛星フレーム言語	+	+	-
c. 階層言語	+	+	-
d. 題目言語	-	±	±

(31a)の主要素前置言語 (+) と主要素後置言語 (-) はVO言語とOV言語、あるいは前置詞言語と後置詞[助詞]言語にもほぼ対応する。英語は主要素前置言語であるとはいえず、(26a)にみられるように主要素後置言語と同じ語順も有するのに対して、日本語は厳密に主要素後置言語である。いずれにせよ、文と文の連鎖では§2で述べたように、どの言語も一般に同じ主要素前置で生成解釈される。(31b)で英語や中国語が衛星フレーム言語 (+) であるのに対して、日本語は動詞フレーム言語 (-) に属する。両言語の違いは文構造の経路表現に限られる。(31c)の階層言語 (+) か非階層言語 (-) かは語順が固定しているか否かと関連してくる。語順が固定しているか自由であるかは程度の問題でもある。(31d)において中国語と日本語には題目 (topic) をとる文が存在する。しかしすべての文が題目を有しているわけではないため(31d)では±と表記した。英語には確かに題目が存在しない。しかし題目が話題を示す語句とみるならば、文を連ねる談話において何が話題であるかは容易に推論される。(31a-d)は言語類型と呼ばれるが、しよせん文構造の類型にすぎない。(31b,c)は談話内の各文で同じ類型を繰り返すにしても、談話構造として文と文のつながりに影響を与えるものではない。(31a,d)は上記のように、文を連ねる談話構造では諸言語に類似のふるまいがみられる。しかし残念ながら文を最大の単位とする言語類型は、生成文法のパラメーターを含め、このような事実を無視している。さらに談話構造では諸言語において概念や命題をつなぐ言語普遍的な意味上の原理として、演繹法などの論理演算、連想、定情報から新情報への流れを含む写像一貫性の原則、高次表意、デフォルト解釈などが働いている。

かつてHjelmslev (1943;林訳1959:18、Whiffeld訳1961:26) は(1b)でみたように、ラテン語の前置詞sineと奪格は一方依存の関係にあるが、個別言語のテキストを離れ普遍的な観点からみれば、前置詞とその目的語は互いに他の存在を前提にする相互依存の関係にあると述べた。これは卓見である。(1)で述べたように、依存関係という概念はHjelmslevでの存在の前提予測関係か、依存文法での範疇の主従関係かで違いがあるが、いずれも個別の事例でみるか、普遍的な類または全体でみるか、あるいは部分か全体かによって依存関係の視点が変わってくる点では共通している。

われわれは母語を習得する過程で特定の動詞が特定の名詞と結合し、特定の名詞が特定の形容詞と結合することを知る。そのうち母語を習熟するにつれて、語と語、文と文のつながりのパターンを知るようになり、特定の名詞から特定の動詞や形容詞が連想されたり後続の文が予想されたりする。その結果、日記やメモに名詞止めの文ができたり、動詞と名詞や名詞と形容詞が相互依存のよう感じられたり、(31)の言語類型の違いを超えて文と文のつながりの生成理解が容易になったりする。

本稿は依存関係を複数の形態素や語だけでなく(13)(14)のように複数の文や談話全体の意図・現実世界についての知識・信念体系に由来する価値観などにも適用し、(26) - (30)のように同じ主要素に依存する姉妹どうしに相互依存の関係を認めたり、さらには従来一方依存とみなされた語結合や構文にも視点によっては相互依存の特性があることを示してきた。依存関係は、適用範囲を拡大し、その概念を見直すことによりはじめて諸言語間の類似性や同質性を示し、言語構造全体の結節点に

なることができる。依存関係に限らず、あらゆる言語構造の分析において文内の静的な (static) 関係にこだわってはいは言語の動的な (dynamic) 全体像を見失うことになる。今日の言語学にとっては分析対象をいかに拡大し、動的な言語表現にいかに迫るかが最大の課題といえよう。

引用文献

- Aitchison, J. 1978. *Linguistics* (Teaching Yourself Books). London: Hodder and Stoughton.
- Anderson, J.A. 1971. *The Grammar of Case: Towards a Localistic Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1977. *On Case Grammar: Prolegomena to a Theory of Grammatical Relations*. London: Croom Helm.
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- . 1970. 'Remarks on nominalization.' In R.A. Jacobs and P.S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221. London: Ginn.
- . 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Hale, K. 1978. 'On the position of Walbiri in a typology of the base.' Mimeo. MIT.
- Hjelmslev, L. 1943. 'Omkring sprogteoriens grundlæggelse.' In *Festskrift udgivet af Københavns Universitet i anledning af Universitetets Aarsfest*, 3-113. (林栄一 (訳述) 1959 『言理学序論』 (英語学ライブラリー (41) (Whitfield の試訳 1953 に基づく訳述) 東京: 研究社) / F.J. Whitfield (訳) 1961 *Prolegomena to a Theory of Language* (Revised Edition), Madison: University of Wisconsin Press)
- Hudson, R. 1984. *Word Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
- Jackendoff, R. 1977. *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 児玉徳美. 1980. 「語彙部門の拡大——変形文法と娘依存文法の場合」『外国文学研究』48:1-38 (立命館大学)
- . 1982. 'Constituency grammar and dependency grammar.' 『外国文学研究』55:15-46 (立命館大学)
- . 1987a. 『依存文法の研究』東京: 研究社.
- . 1987b. 『語順の普遍性』京都: 山口書店.
- . 2006.a 『ヒト・ことば・社会』東京: 開拓社.
- . 2006.b 「言語学は分析対象をいかに拡大できるか——閉塞状況からの脱出に向けて——」『立命館文学』596:1-20.
- . (準備中) 「ラングとパロールの見直し」.
- 小泉 保 (監訳). 2007a. 『構造統語論要説』 (Tesnière 1959 の訳) 東京: 研究社.
- . 2007b. 『日本語の格と文型——結合価理論にもとづく新提案』東京: 大修館書店.
- Melčuk, I.A. 1979. *Studies in Dependency Syntax*. Ann arbor: Karoma.
- 王 銘宇. 2007. 'A Comparative Study of Word Formation between English and Chinese.' Doctoral Dissertation (Ritsumeikan University).
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.
- Tesnière, L. 1959. *Éléments de syntaxe structurale*. Paris: Klincksieck.
- Williams, E. 1981. 'On the notions "lexically related" and "head of a word".' *Linguistic Inquiry* 12:245-274.

(本学名誉教授)